

* 被災地&周辺の燃料不足は続き、怒り心頭！

震災から17日目、被災地には間に合うだけの燃料はありません。もちろん周辺の盛岡市も休業のガソリンスタンドも多く、2時間待ちの状況は変わりません。出荷しているという燃料はどこに行っているのでしょうか。

テレビ映像で流れているように、3月末というのに被災地は大変な寒さです。この寒さに灯油がない、ガソリンを手に入れるために3時間も並ぶ状況に虚しさを感じてしまいます。

こんな風になることは最初から予想できたことです。残念ながら「石油業法」が廃止されているので、石油元売会社に直接的な法的責任はないかもしれませんが、命にかかわる暖房用灯油や輸送手段に欠かせないガソリンの供給を、どうしてこの先進国である日本が出来なかったのでしょうか。その要因を元売やマスコミが①製油所が壊れたこと②タンクローリーが流されたこと③日本海側の道路も壊れたこと等挙げていますが、東京以西からタンクローリーを各県ごとに数台まわしてもらい(船舶輸送)、製油所で増産しても間に合わない燃料は、日本海経由で一時的に製品輸入もできたはずですが、なぜ、それが出来なかったのかを考えると「石油業法」廃止にともなう石油元売各社の合理化方針があります。①最小限の在庫しか持たない②製油所の統廃合で大都市近くと太平洋側に偏在③配送手段の陸路への偏り等が考えられます。

北国の私たちが灯油で交渉すると、合併して合理化され、備蓄が少ないのでは質すと「いざという時は製品輸入があります」と言い続けました。今がいざという時ではなかったのでしょうか。日本海側の道路の損壊もほんの一部です。あれやこれやで出来ない理由ではなくて、石油連盟が対策会議をいち早く立ち上げ、政治や組織を動かしてフル回転すれば、何とかあったのではと歯軋りしています。この時代でも決して元売は赤字ではないのです。

また政治も、早い決断で元売を動かすか、自前で輸送手段を持つ自衛隊に全国の駐屯地の燃料を一定度集め、被災地対応を早くするか何かできたはずですが。

春というのに被災地のこの寒さや、身内を探したくても、食料を調達したくても、ガソリンのない状態を想像してください！皆さん一緒に考えてください！今後のために、いろんな角度から燃料問題の専門委員会も全国消団連に必要ではないかと思っています。

東京のガソリン不足は19日からの3連休後、嘘のように解消したと報道されています。盛岡でさえ10日間はバスも動けませんでした。今は漸く動き出していますが、間引き運転で朝晩は東京のラッシュ時の電車並です。それでも公共交通がある所はまだいいのですが、自家用車だけが生活の支えという場所が、今回の被災地では多いのです。

* 被災地、宮古に行ってきました！

3月23日(水)被災地の宮古を見舞いました。いわて生協常務理事時代に一緒に活動した人たちと、消費者行政推進の要請でお世話になった相談員の方の安否を確かめたい思いを抱いて現地に入りました。宮古市全体になると海岸が多い旧田老町(いわて生協の産直わかめのふるさと)が壊滅に近い被害を受けているのですが、旧宮古市内は津波が押し寄せた範囲は狭く、道路1本違うと「ここで災害があったの？」というぐらいでした。しかし、今回の津波のエネルギーは強く、頑丈な防波堤が裏にあり下閉伊川の河口に近い市役所とそれに続く繁華街が波をかぶりしました。市役所の1階は上の写真のように12日もたっても、対策に追われて片付けられていませんでした。奥のほうに明るく見える部屋が相談室だったところで、宮古市自慢の正面玄関に近く、早くに消費者相談を始めたところです。今、市民生活相談室は岩手県の振興局の2階を借りて相談業務をやっています。



←市役所の正面玄関。駐車場の為整理



↑

住宅地が手前に寄せられ、真中左、
観光船が打ち上げられている

いわて生協合併時、被災地大船渡の援助を担当した私と一緒に役員として活動した方が、今は宮古の沿岸部に住んでいたの、どうしているか心配だったので、元気にボランティアをしていました。車は流されたが、家は駐車場よりちょっと高台にあつて無事と

のことでしたが、水も電気もないためご近所のお年寄りを説得してまとめ、みんなと避難所で暮らしていました。八戸に単身赴任している旦那さんに来たらといわれても、ご近所のお年よりと別れることが出来なかったそうです。代車のガソリンがあるからとテレビ映像のような世紀末の光景の海岸を案内してくれました。あまりの光景にシャッターを押すことが出来ませんでした。